

平安時代	
1000 頃	『枕 草 子』 まくらのそう し
1008 頃	『源氏物語』
12c	『今 昔 物語集』 こんじゃく
1185	平家滅亡 めつぼう
鎌倉～室町時代 かまくら むろまち	
1205	『新古今和歌集』 こ ぎん
1212	『方 丈 記』 ほうじょう き
1235 頃	『小倉百人一首』 お ぐら
13c 頃	『平家物語』
1331 頃	『徒然草』
1338	室町幕府開かれる
1600	関ヶ原の戦い せき が はら
江戸時代 え ど	
1603	江戸幕府開かれる
1685	生 類憐れみの令 しょうるいあわ
1694 頃	『おくのほそ道』

徒然草

鎌倉時代の末期に、兼好法師によって書かれた随筆。
序段と二四三段の

章段からなり、自然、人生、社会などさまざまな事柄が、多様な視点から描かれている。

徒然草 仁和寺にある法師 参考資料

仁和寺は、京都市右京区御室にある、真言宗御室派の総本山です。八八六（仁和二年、光孝天皇が鎮護国家の道場として造宮を発願し、その志を宇多天皇が継いで八八八年に完成させました。のちに宇多天皇が出家して仁和寺の法皇となり、以降、代々皇室出身者が住職（門跡）を務め、平安時代から鎌倉時代には門跡寺院として最高の格式を保ちました。

その後、応仁の乱（一四六七～一四七七）で、ほとんどを焼失しましたが、江戸時代に再建されました。一九九四年に「古都京都の文化財」の一部としてユネスコの世界文化遺産に登録されました。



『京都名所帖』（明治時代／国会図書館デジタルコレクション）

徒然草

参考資料（兼好法師による読書のすすめ）

ひとり灯のもとに^{ともしび}

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、
こよなう慰む^{なぐさ}わざなる。

*文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南
華の篇^{くわへん}。この国の博士^{はかせ}どもの書ける物も、いにしへのは、あは
れなること多かり。
(第三段)

ただ一人、灯火のもとに書物をひろげて、見も知らぬ昔の人を友とすること
こそ、何にもまして、心慰むわざである。

書物は、『文選』の感銘^{かんめい}深い巻々、『白氏文集』、『老子』や『莊子』の言葉な
どがよい。わが国の博士たちの書いたものだと、昔書かれたものであれば、感
銘の深いことが多い。

*「文は……」と書名をあげる表現は、『枕草子』に学んでいる。

*文選 中国、南北朝時代、梁の武帝の子である昭明太子（五〇一―五三二）によって編纂された詩文集。『白
氏文集』とともに王朝時代以来、貴族の教養の書として愛読された。『徒然草』にもたびたび引用される。

*白氏文集 中国、唐の詩人、白居易（白樂天）（七七二―八四六）の詩文集。

*老子 中国、春秋戦国時代の思想家、老子によって記されたとされる『老子道德経』のこと。

*南華 『莊子』のこと。中国、戦国時代の莊周の著書とされる。



『絵本徒然草』(西川祐信画／江戸時代中期の作品／国立国会図書館デジタルコレクション)